

祝

2013年3月 博士号(学術)取得

## 伊坂善明さん(58歳)

【論文テーマ】省エネルギーの観点からみた公立学校への空調一斉導入の効果に関する研究

## PFI事業の良い面を震災復興や社会貢献につなげたい

「私はずっと、アンチ東京なんです」と言う伊坂善明さん。最近に東京タワーを望むモダンなオフィスと、温和そうな日本人の外見からは想像がつかない、刺激的な言葉からインタビューは始まった。

「東京は一極集中で、情報や資金も豊富。でも知恵はどうなのか? 知恵を使って、安上がりで役に立つ仕事に関わる方が面白い」と、関西や地方にこだわった。京都大学建築学科より同大学院。都市計画コンサルタントを経て、三和総研(現三菱UFJリサーチ&コンサルティング)という職歴においても、地方自治体のまちづくり計画を黒子的に支える仕事など、ずっと関西を中心に活動してきた。

## ■PFIで京都市の全小学校にエアコン導入

そうした中、2006年に京都市の全小学校にエアコンを一斉導入する事業に参加する。小学校150校について、民間の資金と事業体によるPFI方式を提案し、採用された。政令指定都市では全国初の取り組みで、他の自治体にも広がるなど、学校教育界では話題となった。

しかし、全校・全教室にエアコンが導入されることで、社会全体のCO<sub>2</sub>排出量が増えることが懸念された。そこで伊坂さんは、業務を離れた第三者の立場から検証してみたいと、2008年に京都府立大学大学院に籍を置いた。環境負荷、事業の効果、従来方式とPFI方式による比較の、3つの観点から研究を始めた。

PFIの利点は資金面だけでなく、設計、仕様決定、導入後のメンテナンスなどの役所の業務を軽減

できる点にもある。通常の公共事業の入札が仕様発注であるのに対し、PFIは性能発注。性能を達成するための仕様は民間が考案する。

建物などのPFIでは、使いやすさやデザインといったソフト面の公平な評価がむずかしい面もあるが、設備や耐震補強的なもの、特にエアコンの場合はエネルギー消費量など性能を数値化しやすいため、PFIが効果的だと分析する。

## ■環境負荷はむしろ軽減

環境面の評価では、想像以上の好結果であることがわかった。ガスヒートポンプ式エアコンの導入により、夏期のエネルギー消費量は従来方式との比較で3割〜5割減。冬の暖房時のCO<sub>2</sub>排出量は、以前のファンヒーターに比べて約半分となり、年間の環境負荷はむしろ軽減される結果に。



東京への単身赴任で大学の研究室からは遠くなったものの、一人の時間は論文をまとめるには好機となった。

今回の研究成果は、エアコン導入に限らず社会に活かしていきたい。例えば、学校の耐震補強はかかり進んではきたが、現在は躯体構造の補強が主で、天井の落下に対する補強などは十分とはいえない。それらにPFI方式を導入し、素早く効果的な公共事業が展開されるよう、自治体や教育界に提案していきたいという。

## ■震災復興支援プロジェクトを会社に直訴

在職のまま論文に取り組んだため、ゼミに通えるのは月1回程度だったが、京都府立大学の指導教授は社会人の博士号挑戦にとっても理解があり、協力的な環境を作ってくれた。12年3月博士後期課程単位取得、13年3月に博士号取得を果たした。

自宅に帰る電車の中で夕刊紙を読んでいるとき、財団の博士号支援事業を紹介した10cm四方くらいの囲み記事が目にとまった。50歳以上限定というその内容に驚き、すぐに財団に電話を入れた。「松田理事長のような実践者と、自分と同じように博士号取得を目指すシニアの存在を知って励まされました」と伊坂さん。

研究の最中に起きた東日本大震災。阪神淡路大震災を身近で体験していた伊坂さんは、ボランティアで何度も現地に足を運んだ。同時に、CSRによる復興支援プロジェクトを会社に提案したところ、東京赴任を条件に担当者に任命された。12年6月から「アンチ」は押えて東京に単身赴任。今回の研究成果や神戸の震災復興計画に携わった経験を活かし、主に気仙沼市の震災復興などに活躍中だ。